

第1回 横浜国際園芸博覧会具体化検討会 発言概要

開催日時：令和2年10月30日（金） 13:30～15:30

場 所：合同庁舎3号館6階都市局議室

【テーマの具体化について】

- 企業、個人、いろいろな単位のコミュニティが、最初から住むことも含めて関わるやり方ができないか。100ヘクタールある広い地域で、開催前からそこに新たなライフスタイルのモデルとして住んでもらい、緑や農の暮らしを自ら体験し、博覧会期間中にもその暮らしをオープンガーデン的に自ら語り部となり展示物として見てもらう、というような博覧会にできないか。
- 感染症に関して、歴史を振り返ってもこのような脅威があるたび、一部の「持てる者」が富を手に入れたままに生き残ることが明確化してしまった。それに対し、いかにインクルーシブな社会を形成するかが非常に大きなチャレンジ。『共』、『Co』というキーワードは、自然と人ということだけではなく、下手をするとどんどんと拡大してしまう格差を克服し、人と人との間の『共』をどうやって形成していくのかにも焦点を当てていくべき。
- これまでの博覧会は常に最先端、最新技術と言ってきたが、そればかりでは「格差」はさらに広がるのではないか。足元を振り返ることも大切。
- コロナ後の状況というのは、たくさんの人間に来てもらい展示をすることに対して、根本的な転換が図られる時代。シェアする技術というのはこの1年間で格段に変化した。ここでどういうことが起こったか、どういう新しい生活がここで始まったかというコンテンツが一番重要。大都市の近くで里山的な自然環境が残っているこの場所は、コロナ後の新しい住み方、自然と人間との関係性を再定義するには、最も適した場所。生活が始まっていくというプロセス自身が非常にユニークなコンテンツ。万博とか花博というものの考え方自体をチェンジするものになり得る。
- 昨年度の検討で、国が対応すべき博覧会というところまで来たが、印象として再び、横浜市の博覧会という感じがする。国としての開催意義をもう少し考えるべきではないか。決して後ろ向きの話ではなく、国としての開催意義如何によっては、テーマや意義の柱についても、さらに練ってもよいと考える。

- 園芸博を開催することで声援を送るべき相手は一体誰なのか、主役は誰なのかということをもう少し詰めていくべき。横浜の園芸博をやることで、例えば、北海道の花を中心とする農業の生産者が元気になり、そして、ガーデンツーリズムの対象となる庭を管理している金沢の造園家が元気になる。そういうことの全国の活動の積み上げを世に伝え、広め、声援を送る場として、横浜を会場としてやるというのが園芸博ではないか。
- もっと国の根本的な農業問題を発信すべき。先進国でこれだけ食料自給率が低い国もない。食糧の安定供給や東京あるいは大都市に一極集中する中で残された農村をどうするのかなど、わが国の農業に関して国民と一緒に考えるきっかけが園芸博なのではないか。
- 花の万博のときの準備当初段階の大きな失敗は直前の国際科学技術博覧会の予算・体制などの事業構造を参考にしたこと。国際園芸博覧会と万国博覧会では事業のなりたちが大きく異なる。花の万博では豊かな経済情勢でその後の軌道修正が可能であったが、現状の経済・財政下では途中での転換が不可能。愛・地球博、あるいは大阪・関西万博と同じ構造のミニ版をつくっては、この博覧会はうまくいかないと思われる。
- 今、「農の心」というのが非常に大事。2050年頃になると、食糧危機の問題が非常に明確に、国際的なテーマになってくる。その中で、日本は良い土壌条件を持ち、かつ、自然に手を入れその収穫物を楽しむという伝統と文化があったことを、日本人がもう一回見直すべき。農の心をどうやって心の中に涵養していくのか、全人類にとっても意味があるのではないか。
- 農耕民族には、農業用水の分配など、繊細な配慮をしながら分け合う、シェアリングエコノミーの原型がある。農の心からスタートする伝統文化をしっかりと国際的に発信するというのは、非常に良いこと。
- 愛・地球博の成功の要因の一つとして、10万人ボランティアの存在があり、彼らが楽しくなり何回も繰り返して訪れた結果があつた総合的な人数に膨らんだ。心の中から楽しそうということ、まずバーチャルで受け止め、それをリアルに確かめるというような構図もあっていい。無理に、最大混雑時何人というような詰め込み方で博覧会の成功成否のメルクマールにしないでよいのではないか。
- サブテーマに関しては『Co』というのは良い。世界の先進国の中で、本当の意味での産業としての農業が、空間的にも市街地と混在しながらいまだに息づいている国は、日本以外にない。その価値に一番気付いていないのは日本人であり、さらに言えば行政かもしれないと思う。既存手法でできなかった、しがらみの中で克服できなかったことを、あえてこの場で実験として行い、レガシーとしてつなげていくことが検討できないか。

- 今、偏西風がものすごく荒れ始めており、ここは東京湾に面していて風の通り道となって大暴れする可能性があり得る場所。川の跡は要注意。川、地層、土壌の問題等は、くれぐれもよく検討していったほうが良い。
- 新産業を創出するのは賛成だが、どの枠組みで価値を創造するのが大事。今、バイオミクリーという、生物や自然の構造に学び、化学反応を起こしたり、ものをつくるという考え方が重要で、生き残っていくために身につけてきた進化の知恵が産業になりやすい。生物由来の新産業とか、そういう一つの枠組みを作ったほうが良い。
- 最初に物語を書くという方法もある。絵本を書いてみて、その主人公がどういう未来を欲しているかというストーリーを会場に落とし込んでいくという考え方。また、特定テーマに関するコンテンツでも、アートの力は大きい。アートのコンテンツができると非常に面白いものができる。
- コロナ後に、「幸せ」の定義が変わらなければならない。豊かさというと、モノが多いとかいろいろ誤解を招くが、「幸せ」は未来に対して非常に有効な言葉。ただ、その定義は今までとは全然違わなければならない、その辺をうまく強調すると、アピールできるテーマがつかれる。
- デンマークという国は、産業革命を経験していない。その結果として、国土に満遍なく労働力や頭脳が残った。例えば農村から生まれたレゴ、あるいは、B&O というステレオメーカー等。それが今に至って幸福度世界一といわれる国になった。そういう社会のあり方がこれからの幸せの話と結びつくのかと思う。
- 確かに、工業化は全体ではなく部分的に自己超越するが、農という世界は、最初から最後まで全部自分で面倒を見ることになり、自己完結したユニット。
- 農以前の狩猟採集にも非常に面白い部分がある。里山の中にも狩猟採集的な部分はあるので、レンジを広げて農を考えると面白い。
- 心のプロセスは大事であり、どういう心持ちでライフスタイルを築いていくのかは重要な課題。その辺りが上手に表現できると良い。
- 横浜市からであればこそその色を持って、日本国として世界に発信するという非常に重要な使命があるが、その重要なプロセスを経た結果生まれるのがレガシー。最初からレガシーを考えていくのは、土地利用ではあり得ても、こういうものをつくるから、こういう博覧会にするというアプローチは避けてほしい。この博覧会で世界に対して発信するという崇高な行為を優先してもらいたい。

- 横浜園芸博を契機として産業界の発展に結び付くようなコンクールの開催を重視したほうが良い。ジャパンフラワーフェスティバルが、今途絶えてしまったという実態があり、その原因は、人集めを目的にした一般向けの単なるフェスティバルとなり、実際の商品生産や売買などの商談に発展しないなど、花き業界へのフィードバックが少なかったため。現在、種苗会社が生産者、市場関係者と実施している催しのようなビジネスに直結する工夫が必要。
- 花き分野で世界に発信しうる具体的なコンテンツのイメージとして、例えば次のようなものがある。1) 遺伝子組み換えによる青い花の開発、2) 日持ち性に優れる品種の開発、3) 温暖化に対応し、夏期の会場で活用でき、アジアへの普及も期待される新品種を活用。